

三木露風東北巡講における作品の諸相

近藤 健史

一、はじめに

三木露風は、北海道のトラピスト修道院を辞任した後、カトリックの宣布者であるかのように各地へ出かけ、講演活動を活発に行っていた。大正十五（一九二六）年五月から六月にかけて、東北巡講の旅に出かけ岩手県、青森県、秋田県、山形県を巡り、多くの講演をしている。また、各地で作品も作っている。

しかし、この巡講における作品については、作品集や『三木露風全集』などに収められていないことから、ほとんど知られていなかった。また、東北巡講の旅に関する研究も、平成六（一九九四）年に家森長治郎による、新発見の長詩篇「天父と閑古鳥」についての論考があるのみである。そこで、初めて東北巡講の旅の大まかな行程が示めされ、紀行文が『山崎新聞』（当時、兵庫県宍粟郡山崎町）に連載され、カトリック雑誌『小羊』（四国高松市）に「巡講記」が掲載されていることが明らかにされた。^{注1}

ところが、この『山崎新聞』は公的機関などに保存されていなかったことから、容易に目にすることは困難であった。この度、縁あって『山崎新聞』の原本を閲覧する機会を得て、東北巡講の旅にお

ける紀行文の全容を知ることができた。

本稿は、露風が東北巡講の紀行文を寄稿した『山崎新聞』における「北日本の旅と自然と（一）」（三十一）（昭和三年二月十六日）八月二十一日）と、カトリック雑誌『小羊』の「東北巡講記（一）」（三）（昭和三年七月・八月・九月）、「秋田山形新潟巡講記（一）」（三）（昭和三年十一月・十二月・同四年一月）とに掲載された詩、短歌、俳句などの作品について考察したものである。

これらの作品は、今までほとんど見出し出されないままで、珍しいものである。

二、岩手県盛岡市における作品

露風が盛岡を訪れたのは、この時が初めてであった。盛岡駅に到着したのは、大正十五年（一九二六年）五月二十三日朝八時過ぎである。滞在は、二十五日十二時に青森県三本木に出立という短いものであった。

その二日間は、講演や歓迎会で多忙であった。例えば、到着した朝九時から宿泊先でもある四ツ家天主公教会でミサに出席、その後信徒たちに東京の教会の教勢などの話をし、午後は東北高等女学校

の講堂で講演、夜六時半からは内丸の西洋料理店「日盛軒」における歓迎会に出席という日程であった。翌日二十四日は、午前十時より県立盛岡中学校で講演、午後二時より県立女子師範学校にて講演、午後七時からは教会における神父主催の慰労会に出席、十二時解散という忙しさであった。

そのような状況でも露風は、行った先々で即興の作品を作って揮毫している。例えば、教会においては「各々揮毫を求められたので、私は短冊や式紙や或いは画帳などに詩歌を書いた。主として其の作品は即興で其の場で作ったものであった」、「其の時新聞記者は各々の為に私が書いた短冊式紙濤を集めて其の歌を新聞に載せる為に、皆から借りて持ち帰った」と記している^{注2}。また、盛岡中学校での講演終了後の場合は、「教職員の希望の色紙や短冊に、新作の短歌を書いた。外には、八重桜が満開であるのが窓から見え、その下の芝生の青い色も美しかった。遠くに閑古鳥が鳴くのを私は聞いて懐かしく思った。其時、私は盛岡の歌を、即席で作り、書いたが、それを書きばなしにして贈ってきたので、茲に収める事が出来なかつた」と記している^{注3}。露風から作品を贈られた人々は、盛岡公教会の所報に「中学校でも女子師範でも先生方は詩や発句などを書いていただき皆さんよろこんで居るそうです」と伝えられている^{注4}。

宿泊先である教会にも、多くの来訪客があり、色紙短冊等に歌を書いている。その来訪客の一人に、露風に自作の歌集を贈るために訪ねてきた小田島孤舟がいた。盛岡の歌人である孤舟は、その時のことを、次のように歌にしている^{注5}。

四谷の天主教会に三木露風氏を訪ふ

いのりにと神父は立てりこれやこの天主教会は夕なるらし
つ、ましき夕なりけりこれやこのサンタマリヤの前に語れば

露風は、この五ヶ月後に、盛岡天主教会のドシエ靈父に「盛岡教会主任司祭ドシエ師の聖職二十五年記念に寄せた祝歌」と題する詩を贈っている^{注6}。

各滞在先で揮毫した作品は、残念ながら、いまだ確認できていない。そこで、東北巡講における作品の諸相の解明には、露風が寄稿した『山崎新聞』の紀行文や『小羊』の巡講記が大きな手掛かりになる。

次の詩は、県立盛岡中学校における講演を終えたあと、教会に戻り庭園を逍遙した時に口ずさんだものである。その作詩事情については、「時は、初夏にも近い頃なので、私の心には大正六年に東北を旅行した以前の事が思ひ出された。さうして其の時作った詩を口ずさんで見た」とあり^{注7}、また「この詩は、それより以前に、私が奥州へ旅行した時作ったもので、詩作当時から八年を経てあるのであるが、盛岡の景趣にも稍似通うてゐるところがあるので、私は、これを独誦したのである」とある^{注8}。つまり、盛岡における作詩ではないが、過去の詩を回想したのである。八年ほど前の暮春の頃、藤原三代が栄華を極めた平泉中尊寺を観たいと思ひ訪れた時、芭蕉の「夏草や」の句碑や毛越寺などを巡り、他に詩「平泉にて」や短歌八首を残している^{注9}。

「羈旅」

さくら散る

六月の陸奥に

吹かれて歩む

人と馬。

旅に出で

南と北に

めぐり会ふ

三度びの春よ。

都には

夏ごろも

早、匂へるものを

あな寂し、我れは行く、身に染みて。

棧道の日照り雨

霽る、と見れば

しらぐと見えきたる

衣川。

〔『青き樹かげ』新潮社、大正十一年七月。「北日本の旅
と自然と（八）」・「東北巡講記（二）」掲載〕

をとめらは花を摘みつ、あゆみけり

小鳥の飛べる鈴蘭の野に

（『東北巡講記（二）」掲載）

また、この歌から、「鈴蘭は北海道の天使園修道院付近にも咲くし、札幌付近にも咲く。私は此の花の咲くのを見て懐かしく思った」と、かつて住んでいた北海道への思いを述べている。^{註11}

露風がいたトラピスト修道院は、函館市郊外の当別にあり、所在地から当別修道院とも呼ばれている。函館市には、明治十五（一八八二）年に文部省認可の正式な女学校として開校した「遺愛女学校」がある。アメリカ人のメソジスト派宣教師夫妻によって開設されたキリスト教主義の女子学院である。学院では、鈴蘭の花を広く世に伝えたのは、この遺愛女学校の宣教師たちであると伝えられていて、明治時代から鈴蘭摘みの遠足が行われていたという。現在函館市には、鈴蘭の花が咲いていたことから名付けられた鈴蘭丘町がある。大正四（一九一五）年制定の学院の校章は、左右から遺愛の文字を鈴蘭の花が囲んでいる。また、この学院には、体が弱く卒業できなかったが、大正十三・十四年頃には石川啄木の娘京子も通っていた。

盛岡における心境について露風は、「教会にゐても外を歩いても静閑で、且つ嘉悦を感じしめた」述べている。^{註10} それには、好晴な天候、晩春の季節であったことがある。そして、「盛岡市の郊外には鈴蘭の咲く野があった」として、次の鈴蘭の歌をあげている。

その石川啄木と鈴蘭も無縁ではない。鈴蘭は、盛岡市郊外、啄木ゆかりの渋民村にある姫神山のふもとを覆っていて、地元では有名であった。かつて盛岡駅には、ホームで鈴蘭を売る「すずらん娘」がいたのである。その始まりは定かではないが、地元の新新聞によって確認できるのは、露風が盛岡を訪れた大正十五（一九二六）年や

東北巡行記を寄稿した昭和二（一九二七）年より数年後になる。それは昭和五（一九三〇）年に『岩手毎日新聞』（五月十二日）「鈴蘭の花が咲きまして、駅売り近く始める」、『岩手日報』（五月十九日夕刊）「可愛らしい鈴蘭売りの娘、けふ正午の列車から盛岡駅のホームに出る」という記事である。露風が盛岡を訪れた五月中旬は、鈴蘭の花が盛りの時期である。

実は、啄木の詩にも鈴蘭が登場する。鈴蘭は、土地の農民にとっては馬も喰わない迷惑な雑草である。かつて鈴蘭が生える土地は痩せた土地の代名詞となり、畑もできない見捨てられた土地で「狐ころばし」と呼ばれていたと言う。その鈴蘭は、盛岡市碓町で新婚生活を送っていた明治三十八（一九〇五）年十二月二日の夜の作で、極めて印象的な詩「蹄のあと」に登場するのである。盛岡に滞在中の露風は、啄木の文学について意見を求められ、歌よりも詩の方がよいと答え「啄木君の詩には情熱があり、詩趣があり、藝術があるからです」と評価している。詩「蹄のあと」は、『あこがれ』のあとをつぐ詩集のために準備していた『黄草集』と題する詩稿ノートに収められていた。しかし、その詩の初刊は『石川啄木全集第三卷』（改造社 昭和四年）であり、露風が盛岡に来盛する後のことである。

「蹄のあと」 友井口龍城子が新著『蹄のあと』（グスターフ傳）

に饒するの詩

雲わかれ、光天に、
生の火の人の胸に

もえし日を思ほへばや

あな尊と、この國國、

野に谷に、音もこもれ、
ありし日の蹄のあと
花ぞ咲ける。

選られ児の胸にもえし
火よ、神のさかえなれば、
あはれ、火のつるぎ、草を
なぎ立てし戦の野の
駒光る蹄のあと、
さくは、見よ、花鈴蘭、
香も高けれ。

しろがねの花の鈴や、
かをりこそ美し響き。
鳴るは、世のとこしなへに
熄えぬ光の功積功積、また、
朽ちぬ世の祝の幸日、
年毎に野邊にかへる
とはの春よ。

（以下省略）
（詩稿ノート 『黄草集』『江畔雜詩』『啄木全集第三集』

岩波書店、昭和三十六年）

露風は、盛岡を訪れて深い親しみを感じたことの一つに「故石川啄木君の記念碑が盛岡郊外に建つてゐる。石川君は盛岡付近の洪民

村の出身であるからであった」と啄木をあげている。^{注13} また、「民衆的な短歌を作った故石川啄木君は岩手県下、洪民村の人で、盛岡に近い所に生まれた。現在は其の郷土に記念碑が建つてゐる。彼は岩手山を歌に詠じてゐるが、その岩手山は実に秀麗なやまである。峰に雲を置いて、頂が見えぬ事がある。盛岡市は此の山を後方に負うてゐるから一層景色がよいのだ」と、岩手山を眺め啄木への思いを語っている。^{注14} 来盛の数年前にも、東京から北海道の当別にある修道院に帰る途中、東北線で青森に向かう汽車から盛岡の岩手山を見て、「岩手山の見える間、啄木のことなど思ひながら過ぎた」と記している。^{注15}

啄木の作品を高く評価していた露風は、啄木が亡くなった三年後の大正四（一九一五）年の夏、当別の修道院に留まっていた時に函館立待岬近くにある啄木の墓を訪れている。そして「啄木を弔う」という詩を発表している。^{注16}

露風は、啄木ゆかりの地に咲く鈴蘭を見て、啄木のこととも思い出していたのではなからうか。

二、青森県三本木町における作品

五月二十五日夕方、東北巡講の第二の目的地である青森県三本木町（現在の十和田市）に到着する。その町では、醸造元であり名士である二代目三浦萬之助宅に、五月二十五日から三十一日朝まで滞在している。初代三浦萬之助は、この地に初めて天主公会教会を建てた人であり、三浦家は熱心なクリスチャンであった。

到着したその日は、「コルジェ靈父や私は聖堂に入りて感謝の祈

りをなし後に教父館で三浦君を加えて三人椅子に倚つていろ／＼の話」をして再会を懐かしんでいる。^{注17} この町での滞在は、親しい友人がいることもあつて六泊七日であり、講演会も少ないことから心休まる日々であつた。

そして、三本木町を離れる前日の五月三十日、三本木町の野の風景と閑古鳥に寄せて、天父の恩恵をテーマとする長詩篇を作っている。^{注18}

「天父と閑古鳥」

我愛する三本羅風の妻のモニカに贈る

一

雨降る空のかなたなる、
林の上になくとりよ。
そは我が愛する閑古鳥。
皐月の末の或るひと日。

二

そは降る雨の音のして、
庭の若葉の色を増す。
躑躅の花のくれなゐに、
あるひは白に咲き揃ふ。

三

又も聞ゆる閑古鳥。
聞くとおもへば止み絶えて、
しづけき勝る青葉陰、
いと懐かしき庭の昼。

四

神の恵みの其の声よ。
いつしか雨は霽れあがり、
おもひで深き野をおもふ。
聴けば声佳き閑古鳥。

五

此処は陸奥晩春の、
若草繁れる野の町よ。
天父の聖旨に副ひて来て、
吾はめぐ美の香に浴す。

六

或時さまよふ野や林
天に在す大神の、
いとくふかき愛をもて、
聴きし声好き閑古どり。

七

皐月の丘の片辺り、
白き花咲く水のべよ。
友としふたり語らひて、
遠に鳴く鳥聞きにけり。

八

見れば青くさ茂りたる、
野をば流るゝ真清水の、
うるほし行きて音立る、
いとも麗はし五月の野。

九

嗚呼閑古鳥 閑古どり。
この時鳴ける閑古鳥。
わが故郷の学び舎の、
寮舎の昔、憶ひ出づ。

一〇

そこは翠の山に、
囲まれ、水の、いと清く、
朝暾の光希望あり、
夕うるはし日の余栄。

一一

我いと若き齡にて、
御神の御恩寵享けし時、
愛と希望に燃えしとき、
天の寵児と称ばれたり。

一二

天にまします我が神は、
吾は知らねど、今想ふ―
其時日毎に年毎に、
天より恵みて照らされぬ。

一三

いと佳きわれの青春よ、
過ぎて往きける其のかみよ。
心とどろき、胸もえて、
春を愛しき 夏秋も。

一四

春は川辺の路往きて、
野に咲く花を摘みにけり。
山や野原のそゞろゆき、
桜や、すみれの花めでぬ。

一五

詩の寵得ては歌しるし、
友のなさを天主に享け、
そのとき聴きし閑古鳥、
妻よ吾妻。吾れ聞き、ぬー。

一六

我れ、いま、歌ふ、われ語るー
御父、われを畴昔より
天にて地にて愛されき
天にて地にて愛されき。

一七

緑の小山に我れ上り、
国を思ひぬ、よき国をー
わか葉の中に花ぞのを、
善き愛の家まほろしをー。

一八

愛する妻よ、われら今、
愛の花園心には、
ふたりし、持ちてありぬるよ、
されど、その我れ、汝を知らず。

一九

天父の大神知りたまひ、
汝をば我と結ばれぬ。
愛する吾つま、わが婦よ、
白き花なる、かんばしきー。

二〇

吾今、御旨のまにまにぞ
聖教伝ふべく来り、
北の陸奥、盛岡や、
此処の翠緑の三本木ー

二一

征旅の如くに語りたり
人々の為、神のため、
み教弘めてかたりけり、
かくてぞ、詩の寵、今ぞ得し

二二

汝れ知ることく、天の母、
父なる大神諸共に、
われを抱きて示します、
春の、御蒼穹と野の緑。

二三

此処の野辺みなおほはれぬ、
榎や杉やもろくの、
色好き草木の緑もてー、
あるひは花もて飾られぬ。

二四

黄なる花咲く野に來り、
むらがる其の花ながめつつ、
草に憩ひて、我れ在れば、
閑古鳥啼く、遠き森。

二五

西の森にてなくを聞き、
やがて南に啼くを聴く。
うれしき声の閑古鳥。
時には、ほのかの其の声よ。

二六

我その声をきくときは、
心に喜悅湧き來り、
神の御恵思ふなり、
また思ふなり過ぎし日を。

二七

あ、閑古鳥、汝が声は、
我に似たりと思ふなり。
いと懐しき閑古鳥、
野を飛びて行く閑古鳥。

二八

愛する妻よ、又、語る、
彼の修道の院の場、
尊き神を拝する処、
かしこのめぐりの山や野や。

二九

かしこに啼きぬ閑古鳥、
妻よ汝も思い出で、
その声偲べ、かくてまた、
思へよ、彼の日の修道院。

三〇

その時は我はしば／＼ぞ
閑古鳥啼く声を聴き、
いと静かに安らけき、
歌の心地を覚えける。

三一

朝に夕に啼きければ、
汝も親しく愛したり、
妻よ、われ等は語りけり、
彼の閑古鳥、その事を―。

三二

或日に、妻よ、汝は見き、
我等の楽しき愛の国、
そこの窓辺に汝は見き、
彼の鳥のかげ、其の振りを―。

三三

愛する妻よ、もろともに、
われら、旅路に出でし時、
旅にて聴きぬ閑古鳥、
夕映の佳き山裾に―。

三四

或は聞きぬ旅の先、
港の町の家の窓、
汝と我とは、そこに居て、
青葉に啼ける閑古鳥。

三五

都にありて、或時に、
時計の仕懸に、閑古鳥、
啼く音のありしを二人して、
我等は聴けり我妻よ。

三六

こ、は陸奥、吾独り、
神の恵の中に有り、
日々に、我が妻、汝が為に、
我は祈れり、恵あれ。

三七

汝知る神の司祭なる
神父と共にわれ、或日、
遠く歩みて森に往き、
御神の御業、其処に見ぬ。

三八

長くつらなる青き樹の、
木陰の路を我等行き、
森に入る路、とある角、
神の、はからひ給ひたる、

三九

一つの棘ある木をば見つ、
神父は、どまり、それを言ひぬ、
「こを見よ、猶太の樹とは云ふ
棘あり、其れ故、斯くのごと」――

四〇

神父は、又も、言ひ次ぎて、
「このとげ、痛しイエズスの、
御冠、之れぞ。長さ、ほぼ、
一二寸」とて指し示す。

四一

其時、我は、思ひたり、
「天父の、この木を此処にしも、
路の曲れる角にしぞ、
生へしめ給ひたる、」と木を。

四二

神父に我は斯く言ひぬ、
「天父、この樹を神父へと、
見せしめ給ふ聖旨にて、
路の角には在るならん」。

四三

此猶太の樹、阜棘と、
我が日本にて言へるなり。
七つの葉合ひ十四葉、
数もまた奇と謂ひつべし。

四四

愛する妻よ、かゝる棘、
樹の膚に有り、その生ふる、
異様の姿、見る時は、
天父の御わざを思ふなり。

四五

我等往きしに、暫しして、
一つの森に入りけり、
我れのその時見たりしは、
大きな一つの磐なり。

四六

キリスト言はれし聖言に、
「汝は磐石」——この岩を、
我が見て、心に思ひしは、
其礎の事なりき。

四七

天父が、磐を、其の森に
備へられたるにてあらむ—
斯くとぞ我は、思ひける。
我等は尚も進み往く。

四八

愛する妻よ、しばしして、
我は聴きたり、森の中。
彼方に啼きし閑古鳥、
声の悲しく想はれて—。

四九

天父の御愛のいつくしみ、
哀憐み給ふ聖心に、
つかはされたる閑古鳥、
かなしき愛の閑古どり。

五〇

天父の御愛を懐ひつゝ、
吾は歌をば作らむと、
案じて歩みたりけれど、
善き歌としては無かりけり。

五一

天の神をぞひたすらに、
われは、誠に思ひける。
まなこ、うるみて、我れ歩み、
若葉影さす路行きつ。

五二

愛する妻よ、我は今、
近き日、あゆみし夜の事を、
汝に語らむ、汝も知れる
コルジェ神父と野へ行きぬ。

五三

五月の夜は香ばしく、
野は一面に煙りたり、
月はあれどもかくれたり、
土の匂も、好かりけり。

五四

我、青春の時にして、
作りし詩にぞ六月の、
夜の野面を歌ひける、
其を、我、其夜懐ひ出づ。

五五

天父は、かゝる夜にも亦、
深き御恵加へられ、
いと興深く覚えつゝ、
心ゆくまで語らひぬ。

五六

その夜は啼かず閑古鳥、
昼に啼きたる其鳥を、
吾は心におもひいで、
はるか野には歩みたり。

五七

いとなつかしき夜のことを
我は忘れずあるならむ、
森影見えず、暗けれど、
五月の夜は、柔し。

五八

けふ、この家に詩を書きて、
汝に贈ると筆をとる。
その時又も、大神の
御恵にて鳥の啼く。

五九

いと朗かの閑古鳥、
空に響きて啼きにけり。
其声心に深く染み
日此にも増しいと強し。

六〇

なほ詩をつゞり続けしに、
しばしの後に閑古鳥、
弱き声して啼きにけり、
別を惜む声の如。

六一

今は別れぞ閑古鳥、
斯く我れ、心に想ひつゝ、
夕の机に向ひ居り、
やがてぞ夜なりにける。

六二

愛する妻よ、今は早、
天父の聖旨のまにまにぞ、
秋田の方へ湖越えて、
立つべき時となりける。

六三

我神、我父、汝が上に、
いと安らかなの幸を、
賜らむこと、わがかへる、
其日までもぞ祈るなる。

一九二六年五月三十日

青森県三本木にて

三木 操

(未発表長詩篇)

滞在中の詩の創作について露風は、「私は、三浦氏の宅に居て静かに作詩する暇を持った。私は忙しい時には汽車中にて原稿を書く。併し三浦君の所では格別忙しいためではなく、感謝のために詩文の筆を執つたのである」と記している。^{注19}

この詩「天父と閑古鳥」の背景には、「私は閑古鳥が好きであるから、晩春の白い日の光の中で鳴くその声を聞いて喜びを感じた。三本木野の遠い所にある森に入つて、其処に在る大岩を見たりした。私は、並木に沿ふた路や、水辺を歩むのは好きであるから、この野は私を楽しませた」という三本木原の自然散策がある。^{注20}散策中にコルジェ靈父は、棘のある木を見てキリストが荆棘の冠として被せられたことを連想し「これはユデアの木」と言い、巨岩を見て「汝は磐石^{ペテロ}」とキリストの言葉を想うなど、聖教のことを語り合つていたのである。

この「天父と閑古鳥」の詩について、家森長治郎は次のように説き解いている。^{注21}

三木家に滞在中、近くの森で閑古鳥がよく鳴いた。閑古鳥は、閑谷巖に学んでいた少年のころより、露風の最も愛した鳥である。北海道トラピスト修道院でも、初夏のころには盛んに鳴いて露風夫妻を楽しませてくれたが、今また、この三本木原でもよく鳴いている。カトリックの熱い信仰に生きる露風が、三浦

家の厚遇に感謝し、コルジェ神父や三浦万之助と心ゆくまでその信仰を語り合い、愛する閑古鳥の声音に耳を傾けては、自分の全生涯が、また愛妻モニカと結ばれたのも、すべて天父の恩寵によるものであるという幸せを、しみじみ感じ、その喜びを朗々と歌いあげて、愛妻モニカに贈った詩が、七五調四行六十三節より成る長篇「天父と閑古鳥」である。

三、奥入瀬・十和田湖における作品

五月三十一日の朝、露風は三浦家の人々と別れを告げ、十和田湖を渡り秋田県鹿角郡大湯村に向かつて出発する。三本木町から自動車でコルジェ神父、三浦萬之助とともに十和田湖に向かい、途中で奥入瀬溪谷に立ち寄る。そして平明にして愛すべき景趣であり、深山幽谷の感があるとして、次の二首を詠む。

たづね入る花は無くして深山水の翡翠の色の染むこ、ちする
流れゆく水を追ふべき身ならねどその静けさを愛しくぞ見る

(「北日本の旅と自然と(十四)」掲載)

また、発動機船で十和田湖を渡る途中、勝景に感歎して、「遠望すると四方は山又森林を以て囲まれ、其の間に岬が凹凸して、地勢甚だ変化に富む。湖上を渡るに従つて、鳥あらはれ、崎の巖見え、勝景、数ふるに違がない。私は感嘆しながら、観てゆく。巖のほとりに咲く、紅の躑躅、水に臨みて咲く山桜、その麗しさ」と記している。^{注22}五月末、東京では桜が散つた後であったが、十和田湖では、

まだ桜が盛りであった。次の二首は、その時に詠んだ歌である。

みちのくの果てに來りて眺めやる都にまさる山桜かな

いと深き雪にも枯れず春の來て水にかざせる山ざくら花

〔北日本の旅と自然と（十四）〕掲載

さらに露風は、十和田湖のすばらしさについて「この湖水は区分されて、中湖、南湖、北湖、西湖とされてゐる。西南より、中山半島、御倉半島が突き出でて、中山半島の崎を中山崎と言ひ、御倉半島の崎を日暮崎と言ふ。この崎、甚だ佳景に富む」と評して^{注23}いる。その日暮崎の巖窟を望んで作ったと思われる詩が、未発表詩集に収められている。

「一つの巖窟」

一つの巖窟、

十和田湖の島嶼岬の北端にあり、

自然の工か人工か、

屹立せる巖峭の上部に、

恰も石像を安置せしあとの如くあり。

嗚呼その巖峭、

太古より存在せしものならむ。

天工の斧、自然のいかめしき妙、

仰ぐに雄々しきこと感に堪へしむ。

荒波暴濤、大魚の嘯く如く、

天空を望み高く起る時、

巖峭の下を嘯むこと頻りなり。

海の聖母―海の星―明けの星、

世界に悪をもて沈溺せる人々を、

救ひの手をのべて憐むマドンナ、

荒天の航海中に船夫ののぞむところの燈台。

われをして、そを思はしむ、

十和田湖を舟航中の時、

われは、その巖窟を仰ぎ見て。

（未刊詩集『微光』、『三木露風全集第一』所収）

十和田湖のすばらしさが世に知られる発端となったのは、大町桂月の紀行文であると言われている。大町桂月は、明治四十一年（一九〇八）年八月二十六日から九月十二日まで旅をして、十五編の紀行文を『奥州一周記』として発表している。その中で、十和田湖の中海（中湖）の風景について、「此の中海は、噴火口也と。日暮崎を始めとし、崖の突出せる者多し。崎といふよりも、むしろ巖といふべし。いづれもみな巨巖なり。而もみな姫小松を帯ぶ。一窟あり。御室と称す。窟中二条に別る。いづれも数間にして尽く。劍の如き小石の簇立せる岬を劍岩と云い、姫小松の林を成せる岬を千本松と云ふ」と、火山の噴火によって作り出された変化に富む地形や巖窟の存在を記している。^{注24}

露風の詩「一つの巖窟」とは、この御倉半島の日暮崎にある巖窟のことであろう。十和田湖には、島嶼や巖窟が多く、中世の頃より修験宗徒や山伏の修行の場とされ、島嶼信仰も行われていた。また、八郎太郎に勝利して青龍権現とあがめられ十和田神社に祀られた江戸時代の伝説主「南祖坊」やそのゆかりの地などがある。

御倉半島日暮崎の根元付近、中湖に面した西側岸壁には、上方に「御室」・「奥の院」と呼ばれる洞窟がある。洞窟奥の壁にある青い模様は、龍の目玉、龍神を祀った祠の後ろの光輪、神が創った星や星座がちらばる宇宙の世界などと言われ、驚異の空間である。この巖窟は、岩屋洞窟を拜む自然崇拜から信仰が始まり、古くから祈りや修行のための聖地であった。

また、その巖窟の左下方において、平成二十三（二〇一一）年八月には異常渇水時になると見える巖のくぼみの中に、人の形をした岩が現れて話題となった。それは、仙人になった「南祖坊」か「キリスト像」のようであると言われている。

この御倉半島の一帯は、古来より神域とされており、人々は中湖に面した反対側にある占場から御倉半島に向かって願い事をしたと言われている。

露風は、十和田湖を訪れて十和田神社や「占場」の聖地、巨石や巨木、巖窟などの神秘的な絶景から神聖な気持ちに包まれたのであろう。聖なる巖窟を仰ぎ見て、キリスト教における海の星の聖母ステラ・マリスの聖母（イエスキリストの母マリアの古称）、つまり、希望の印、導きの星としての聖母マリアを見たのである。聖母マリアを海の星の聖母とする呼び名は、海を旅する人や海で生計を立てている人々に使われ、聖母マリアがその人々の案内人、保護者とし

て神と人間の仲裁をするものと信じられている。露風は十和田湖の自然に、そこに生活する人々を守るイエス・キリストの母、マリアを見たのである。

さらにまた、このような風景を船上から眺めて短歌を作っている。この時の状況に関して、同行した三浦萬之助はカトリック雑誌に寄稿している。その三本木教会報において「三十一日コルジェー靈父、拙者と同乗の自動車にて、十和田湖畔を一週して数詩を吟ぜられ、波浪あらきにか、はらず平静に風光を視察なされ、秋田県薄花にて御上陸、大湯の青年諸士の希望による講演をなさるべく御別袂申上げた。あ、雄々しき先生の天父の業の努力の果の大なることを切に祈願して止みません」と記し、露風の作った四首の歌をあげている。^註

「湖上にて」

天の神よりたまひし 十和田湖より

水とわか葉を われは観て行

儉しかる巖の上に 生ひ出て

水にかざせる 山桜はな

天使聖らいで、 みそなはず

春の十和田の 湖の上

水岸に桜と躑躅 咲きそろひ

十和田の春は 盛りなりけり

（初出『声』第六〇七号、大正十五年八月、
『三木露風全集第三』所収）

十和田湖の自然の秘奥なる生命感を、露風はキリスト教の天父の業によるものと享受していたのである。露風はこのような神秘的自然観に関して、夏の盛りに深山を旅したとき、溪流に覆いかぶさった青葉を見て「その発する盛大な気力が心を魅し去ったのである。気力と謂ひ、生命と謂ふが同じく形が無い。それは永生を思はずやうな、不思議な、手にもとられぬ精気である。：僕等が名づけて云ふ生命とは、永生の源である。僕等の肉体や、草木禽獣は、此幻形に宛てはめて書かれた詩語である」と、自然に対して感じる神秘は自然の発する盛大な気力に魅せられるところに生ずるといふ。^注

四、秋田県鹿角郡における作品

(一) 発荷における作品

子の口で昼食を取ったあと発動機船で十和田湖を渡り、午後秋田県の発荷に到着した。そして、同行してくれたコルジェ靈父と三浦萬之助は、ここで別れ三本木町に帰る。大正十五年から三本木教会の主任を務めているコルジェ靈父は、露風とはトラピスト修道院以来親交があり、よき理解者であった。三本木に滞在中、靈父と露風と三浦萬之助は、信仰を語り合っていた。その二人と別れる時に、露風は惜別の詩を作っている。

「十和田湖の別れ」 或るフランス人に贈る

霧白く山より湖にこめて

舟は其中を進み行きたり、

岸边に近づくにつれて、

青き落葉松の梢、霧に浮び、
冷めたき波のしぶき、
我が衣をうるほす。

振返れば舟の後に、

水脈鈍銀色に波だちて、

遙かに来し方は、

小雨の中に見えずなれり、

お、冷やかなる雨の雫よ、

湖上の空気よ。

我は岸边に下りて、

松の木の蔭に立てり。

親愛なる君よ、

さらば別れなり、

我は彼の雨降る山の彼方に行く、

いざさらば、君は、又航路へ―

何故に、斯く別れの惜しきか、

我れ斯く言へば君は、

さらば後に歌作りて送り給へ、

さなり然かせむと我は答へて、

互に見かはしつ、

君は霧にこめたる湖を舟行せり。

我れ峠にて見返りし、
雨の降りたる十和田湖よ。
小鳥隠れに舟消えて、
彼方東に卿は行く、
雨中に鳴ける鳥の声、
我れは聴きつゝ、山越えき。

月日を経ての追憶は、
薄らぎて行くものなれど、
卿と別れし松の木の、
蔭は十和田に雨降りて、
霧こむるとも消え行かず、
なほも記憶は残るらむ。

共に教を宣ぶるため、
渡る十和田の湖上にて、
君はし祈り我は詩を、
作りて主をばたゝへにき。
彼のガリレアの湖に、
似るや否やは知らねども――。

〔十和田湖の別れ——コルジェ靈父に贈る〕『小半』
昭和二年十一月、未刊詩集『静境』、『三木露風全
集第一』所収)

この詩には、伝統的なものと西欧的なものの融合がある。詩の冒

頭では、衣を濡らす冷たき雨やしぶきは、悲しみの涙で袖を濡らす
という古今集や新古今集の和歌を思い出させ、小鳥隠れに消える舟
は、世の中を喻ると漕ぎ去る舟の跡なきごとしという万葉歌を思わ
せる。また、別れの場にある「松」は掛詞で「待つ」の意を暗示さ
せる。そして末尾では、十和田湖をガリラヤ湖に見立てるのである。
ガリラヤ湖の湖畔には、多くのキリスト教の聖地が存在する。例え
ば湖畔近くの山上に建つ「山上の垂訓教会」は、キリストが三年間
を過ごし、この地の漁師たちに福音をし、さまざまな奇跡を起こし
たことから祝福の山と呼ばれている。十和田湖を「ガリラヤ湖」に
見立て、詩「一つの巖窟」で「海の聖母」を詠んだように、十和田
湖は湖畔に住む人々に祝福をもたらす聖地と見たのであろう。
その教えを説くコルジェ靈父と別れた後に二首の短歌を詠む。

久にして会ひしも今はみをしへを伝へむために共に別る、
別る、も心は常に相ひ会はむ清く操を変へぬ松かけ

〔秋田山形新潟巡講記（二）〕掲載)

さらに、発荷峠を登りながら十和田湖を振り返り、二人の乗って
いる発動機船を見て、次の短歌を詠む。

遠く行く船のかげをば見送れば雨は涙とまがふなりけり

〔秋田山形新潟巡講記（二）〕掲載)

発荷峠は、海拔千九百五十尺、しかもなかなか急であるから登る
のに容易ではない。その峠から湖上を見返り、英国の詩人アーサー・

シモンズの歌ったところの「フィンバラの森」という詩を思い起している。^{注27}そして、「その詩は、湖水も歌つてあつたからである。北岸には落葉松の林が黒く繁つて、恰も泰西の名画を見る様であつた」という。^{注28}安部宙之介によると露風は、明治三十九年（一九〇六）十二月頃に「目白の大通りの書店で青い表紙の一九〇五年版のアーサー・シモンズ訳『ボードレルの散文詩』を見出し出して愛読していたという。^{注29}峠から十和田湖の景を眺めシモンズの詩を想起して、西洋の名画を見るようであつたとする背景に、流行であつた象徴主義によるシモンズへの傾倒があつたのだろう。

そのことは、露風がシモンズに関して述べた次のことで明らかである。^{注30}

ウイリヤム・バトラア・イエーツと親友であり、共に英国の象徴詩派運動に尽力したアーサー・シモンズは、特殊なよい詩を書く詩人である。彼は、彼自身の気稟によつて、独自の象徴詩の世界を把持した。強いて彼の詩と似た芸術を求めると、画家のホイスラーの作品である。『十時』の著者である此画家は、黄昏の気分を描いて、幽かな新しい東洋主義の美を西欧の近代に齎らした人である。シモンズの詩は気分致富む。其の気分は柔らかで、霧のやうである。且つ又哀傷的である。その哀傷は勿論抒情であるけれども、気分に含まれてゐるところの哀傷である。

(2) 大湯村における作品

発荷峠を登って、見返り茶屋からは自動車で二時間ほどを経て、

午後遅くに大湯村の谷地健五郎宅に着く。彼は、早稲田大学の同窓であり、鹿角郡の農会長を務めるなどの名望家である。その谷地家の庭において、芭蕉の「月日は百代の過客……」（『奥の細道』）の一節を思わせる次の詩を詠む。

陸奥に、花は咲けども

臯月、今過ぎて行くなり

我も亦、時を惜みて

過ぎて行く旅人なり

（『北日本の旅と自然と（十七）』掲載）

二日目、村の名所である古城跡、山寺、水力発電所を見て回り、温泉に入ったあと、庭の紅い躑躅と白い躑躅とが五月雨に濡れるのを観る。この日、五月雨に十一句を作る。

五月雨や古城の石の蝸牛

五月雨の蓑は案山子の初めかな

水無月は名のみにて降る五月雨よ

さみだれを洩さぬ深き青葉かな

五月雨やみちのしるべに幾十年

さみだる、小田に歩める人は絵ぞ

五月雨や古書を載せたる文机

藁屋根に生たる草に梅雨かな

五月雨や峠の見ゆる山の村

湯の宿の外は梅雨降る八ツ手哉

五月雨に声の幽けし閑古鳥

〔北日本の旅と自然と（十八）〕掲載

三日目の朝、毛馬内町に出発するにあたり、谷地家の家族と別れを惜しんで、次の俳句を作る。

陸奥に花散らぬ間の別れかな

〔北日本の旅と自然と（十八）掲載〕

（3）毛馬内町における作品

大湯村に二日間滞在している間に、六月になった。自動車で次の目的地の毛馬内町に到着した。その時の歌である。

むつの旅してくれば夏となりなほ八重の花盛りなるかも

〔秋田山形新潟巡講記（一）〕掲載

毛馬内町の天主教教会には、プール霊父がいる。神言会に属したドイツ人で身体は小さく、細面で髭があり、極めて温厚な方である。幼稚園を経営している教会は立派ではないが、プール霊父は伝道になかなか熱心である。その霊父を詠んだ短歌である。

はるかなる地にも教はひろまりぬ誠をつくす神父のあれば

〔秋田山形新潟巡講記（一）〕掲載

毛馬内町の宿泊先である布留家の庭において、「私は、庭の木々の新緑が鮮かに目に映った。此の日は六月二日、既に初夏であるから、この色があるのである」と思い、次の一句を詠む。^{注31}

六月や水の滴たる青葉蔭

〔北日本の旅と自然と（十八）〕掲載

また、布留君に案内されて近くを散策する途中、元士族の家の庭から毛馬内富士を望み、「この庭の青若葉の枝越しに毛馬内富士を見るのは、更に興趣がありますね」と感嘆して、三首の短歌を詠む。^{注32}

みちのくに我越えくれば甲斐が根とまがふくすしき山こそ見ゆれ

瑠璃鳥の棲まへる峰に初なつの光輝く妙にこそあれ

古き城廢れたれども毛馬内の富士は雄々しくとはに聳ゆる

〔北日本の旅と自然と（十九）〕掲載

そこを出て、毛馬内の古城址に至る。「山の上に平地があつて広濶で樹木がよく茂り、門址を残す。折りから閑古鳥が、かつこうくと鳴く」という自然の風物に親しみ、短歌を詠む。^{注33}

誰にかも聴かする古き城跡の青葉がくれに鳴く閑古鳥

〔北日本の旅と自然と（十九）〕掲載

また、城址に立っているうちに詩情を覚えて詩を吟じている。桜が盛りの城址から周囲を眺めて懐古の情に駆られる。それは、城を守った猛きもののふであり、千年も昔に京から公郷が毛馬内町に来たと伝えられて能・謡曲に「錦木」として語り継がれ、歌枕にもなっ

ている悲恋物語「錦木塚伝説」である。

「毛馬内城址に立ちて」

水無月の若葉茂りて、
覆ひたる古城の石に、
我れ手をは当て、佇み、
静かなる辺りを眺め、
古を偲び居たれば、
閑古鳥遠くに鳴きて、
其の声は山に響けり。

山彦の返す声をば、
懐かしみ、深山に入りて、
大空を仰ぎ、匂へる、
石楠の花を眺めつ、
青葉蔭立ちて暫しは、
世の事も忘れ果てたる、
今日の夏の初めよろしき。

其昔、城を守りし、
武夫は毛馬内富士を、
仰ぎつ、十和田湖の岸に、
馬進め、遠乗りなして、
鷹狩をなしたりと聞く、
此城の主の裔と、

我れは立ち語りてありき。

「あ、君よ、北の日本の、
武夫は猛かりしかど、
今、君の語るを聞けば、
風流の節もありしと、
覚えつ、我は懐かし」
我は斯く言へるに彼は
尚言へり、昔思ひて―

「我れ幼かりし時に、
祖父より聞きしことには、
城にては月見の折に、
笛吹きて舞も見たりと」
そを聞きて我思へらく―
「錦木の塚のあるには
都より来し人あらむ」

世にも哀れの錦木の、
物語りをば残したる、
此処には笛の音を聞かず、
月日は過ぎて千余年、
我れの来りて弔ふは、
いかなる宿世があるならむ、
僅かに残る石と樹よ。

春過ぎ夏は来れるに、
八重の桜は盛りにて、
若葉にまじる美しき、
眺めを見つゝ、心只、
懐古の情に駆られつゝ、
我れは暫しを毛馬内の、
城の跡には立ちにけり。

〔北日本の旅と自然と（二十）〕掲載

古城址に立つて「古城」から「武夫」や「錦木塚伝説」を連想し、
季節の推移と盛者必衰を詠むのである。

同時に詠んだ、次の短歌には、その無常なるものが鮮明に表わ
れている。

〔歌〕

ものゝふの綴の音は聞かずしてただ盛りなる八重桜観る
八重桜今盛りにてものゝふの命は花と散り去りにけり

〔北日本の旅と自然と（二十）〕掲載

城址から別の道を下り、布留家の庭の上方斜面にある梨畑に出る。
その梨畑の中に立ち、備前閑谷の梨畑を思い、また懐旧の情に絶え
ずして少年時代に作った詩を朗吟する。

〔若き梨の実〕

若葉の頃は梨の実の

風に落つるを防がんと
村の娘が三人、四人
紙の袋を被せるかな

たとはゞ小児可愛盛りの
しほらし如く若き実は
ことゞ頭かくしては
可笑しきふりに袋被る。

かくて真昼を夏の熱に
傷つきもせず生立ちて
頃、秋涼に入らん時
袋よ、やがて除かれむ。

〔十月、熟れて甘し実の
秋を誇りの瑞々と
枝もたわまば市にも売る〕と
畑の主が樂げや。

さば若き実よ、甘きには
寄り来る虫も多かるに
むしばみ除けて百日を
ただ其のまゝに袋被てあれ。

〔夏姫〕血夕会、明治三十八年、「北日本の旅
と自然と（二二）」掲載

露風少年の目には、若き「梨の実」と「村の娘」が重なって映ったのであろう。両者はやがて成熟期には、人の手に渡るのである。少年期の甘く少し悲しい詩の思い出である。

(4) 尾去沢鉱山事務所における作品

小坂町の実科高等女学校で講演した翌日、毛馬内町から自動車で尾去沢鉱山事務所に行く。講堂で二百人程の事務員及びその家族等のために講演する。鉱山事務所から見る風景について、「窓外を見ると、山の翠緑滴たるばかりにて、躑躅の紅き花が山に多くある。甚だ好風景である。…客室より前記の緑林を眺むるに余り好風光であるから、暫く立ちも去りやらず眺めてゐた」と語っている³⁴。一泊した翌朝、人々の別れを惜しむに感じ、帽を振って自動車に乗り帰り去った。その時に作った俳句である。

朝靄のつゝめる山の躑躅かな
みちのくや霞める山の遅き春

〔北日本の旅と自然と(廿三)〕掲載)

五、秋田市における作品

翌朝、秋田市へ出発する。秋田鉄道の毛馬内停車場から大館駅にて奥羽線に乗り換え、夕方に秋田駅に到着する。

(1) 妻仲子宛の「秋田市よりのはがき」に記されていた作品

宿泊先に鹿角郡大湯村の谷地健五郎君が、妻仲子の手紙を持参して来てくれた。なつかしく読み、思いがけないことであつたので大層喜ぶ。そして、秋田市より妻仲子に大湯村から毛馬内町、尾去沢、小坂町で講演したことや八日に秋田市を立てて山形市に行くことなど、近況を知らせる葉書を出す。

その葉書に記し、次の一首を贈る。

雲の峰盛りにいでて初夏のこゝちこそすれ麦は丈のび

大正十五年五月 仲子殿

〔書簡集〕『三木露風全集 第二巻』所収)

(2) 秋田城址公園における作品

六月五日午後五時、秋田駅に到着。翌日午前中、ヨゼフ・ライネル教区長と秋田城址公園を散歩する。その公園の情景について、「内堀に蓮がある。坂の横には数百年を経た老松が林立している。流石は大藩丈あつて城趾が大きく、毛馬内城趾の比ではない。老松の多いのにも昔を語るのがある」と感嘆している³⁵。その時に作った俳句である。

涼風や松に昔を偲ぶ城

〔北日本の旅と自然と(廿七)〕掲載)

(3) 秋田城址公園にて作り、県立師範学校長に揮毫した作品

さらに公園の奥に到ってベンチに腰掛けた。その眺望について「そこからは、遠く迄よく見えた。八郎潟が青い色を刷いたやうに見える

る。それから西の方に雄物川が見える。尚秋田の良米を産する田が東北の方に広々と見渡された。尚又勿論秋田市街は、よく見えた。実に佳景である。秋田の特色の一つとしては風光明媚を挙げる事が能きる」と賛美している。^{注36} その時に作ったのが、次の歌である。

八郎潟遙かに見えてはつなつの日にかがやける青きひといろ

〔秋田山形新潟巡講記（一）〕掲載、「北日本の旅と自然と（廿八）」には、「青のひといろ」として掲載）

その日の午後六時から一般市民のための講演を秋田県立図書館の講堂でした。終了後に教会に帰っていると講演を聴いていた秋田県立師範学校の和田喜八郎校長が訪問して来た。そして求められて画帳に、右の短歌を揮毫した。

六、山形県山寺立石寺における作品

六月八日、秋田停車場から汽車に乗り、山形市に到着する。翌日の朝、立石寺の勝景を見るため、フリーゼ靈父と山形高等学校の守屋教授、その他信者諸氏と共に、自動車に乗って向かった。やがて山の麓に着く。そして日蓮の像と噴水を前にして三句を作る。

銅像に影しづかなる青葉かな

絶間無き噴水の音夏光る

麓にて山を仰げば夏の空

〔北日本の旅と自然と（三十）〕掲載）

この時の情景について、「広き平地が一ヶ所在つて、そこに日蓮の銅像がある。甚だ大なる物である。又、噴水があつて、高く水を噴き上げ、其の水が、した、り落つる音、静寂なる空気を破つて響く。其の玉簾をなして落くる噴水に、日光の輝いてゐるのが美しい」と記している。^{注37}

さらに山路を進み、松尾芭蕉の句碑を見る。

静かさや岩にしみ入る蟬の声

その時のことを「『あゝ、尊し』と想ひて、私は、腰をかがめて、句碑を見る」と記し、「私は、年久しく『静かさや』の句を愛誦してゐたが、今、此の句の詠ぜられた地に来て親しく、其句を味はふのは、何たる清興ぞやと思ふ」と、俗事を離れた山寺を訪れ風雅な遊びを楽しむ心地であると述べる。^{注38} そして手向けの俳句を作る。

古人句あり山径幽に夏涼し

〔北日本の旅と自然と（三十）〕掲載）

そこで、「二行の人々も私と共に皆、芭蕉翁の句碑の傍らに寄つて眺めてゐる。此の道あればこそ、永久に名と句が伝わる。誠、有難きは風雅の道である。芭蕉翁の残せる只一句も、現代人のわれ／＼の胸に響くのである」と感慨にふけるのである。^{注39}

芭蕉への追慕の念は強く、芭蕉ゆかりの地である平泉中尊寺や近江義仲寺を訪ねて詩や短歌を作っている。このことは、一九〇〇年

代の象徴主義移入期の芭蕉再評価の流れとも関わっている。この当時芭蕉は、野口米次郎や浦原有明など近代の作家に広く評価された。^{注40}

その流れにおいて露風は、象徴思想と手法が芭蕉から来ていることを自ら再三語っている。例えば、それは明治四十五年六月八日付の内海泡沫宛ての書簡にある。^{注41}

この頃は古人芭蕉の生涯を深く追慕致居候、時代こそ異なれ芭蕉の感じ詠じたる世界は近代の象徴詩派の真髄にも深く通ふところ有之我國に於ては如斯詩人は他に比儔を見出し兼申候、もとより近代の象徴派の起因するところ文明・爛熟の精神的廢類にありて、我古人の場合とは甚しく面様を異に致し候へ共その厭世的にして常に沈黙を愛することに於ては毫も扱ばず、たゞ芭蕉に於ては東洋的色彩を帯び居れるのみ、その作品が情調を尊び暗示黙想を喜び、魂を浮動の状態におく等の諸点は確かに象徴の真髄に通ふところ多大なりと存候。

そして「西行や芭蕉は、以後益々、読まれなければならぬ」とい^{注42}い、芭蕉の世界に象徴性を発見し「象徴は山岳と共に古しなぞと云ふ大ざっぱなことではなく、其文学精神は、立派な象徴文学として存在して来たのである。芭蕉が新しい俳風を開いて、正風を名づけた其の正風といふ体を考へて見ると、当時、芭蕉の胸に往來したのは此精神だったのである。この詩の幽玄体は即ち今日でいふ象徴体である」とし、「日本に於ける象徴の精神が芭蕉や雪舟や光琳になつてゐることは毫しも怪むに足りないのである」と述べている。^{注43}

七、おわりに

東北巡講の旅は、三つの目的があつた。それについて「友人を訪問する事をも兼ねて各県の講演の約束を果たすため」と、「盛岡や秋田や山形、その他の地方から度々講演の依頼を受けていたが、長らく行けずにいたところ、東京に於ける仕事も一段落を告げたので自然を観る為を兼ねて旅行する事にした」と説明している。^{注44}つまり、講演の約束を果たすことが主であり、友人を訪問すること、自然を観ることを兼ねる旅であつた。

露風は、二十日間の旅において講演十五回、座談会と談話会各一回、お話二回、合計十九回を行っている。そのテーマのほとんどは、「宗教と文学」などカトリックの信仰に関することであつた。ある意味で、宣教のための「巡講」の旅であつたと言える。

教会関係の依頼は、新潟教区長ヨゼフライネルス哲学博士から秋田市に行くことの委嘱を受けていたところに、青森県三本木天主教会のコルヂエ靈父からも手紙がきて、さらに秋田県毛馬内天主公会のポール靈父からも依頼、最後にコルヂエ靈父からの紹介で盛岡天主教教会のドシエ靈父からであつた。^{注45}

また、友人からの依頼は、早稲田大学の同窓であり秋田県鹿角郡大湯村で郡農会長をしている谷地健五郎からである。

友人・知人訪問は、盛岡では県警察部長の欠畑右兵衛（カトリック信者）、三本木では酒造元で名士の三浦萬之助（カトリック信者）、鹿角郡大湯村で谷地健五郎と元東京市役所勤務の汲川隆敏、毛馬内町では昔の士族で幼稚園経営者の布留君、秋田市ではヨゼフ・ライ

ネル教区長、白川伝教士、山形市では山形高等学校の森谷教授（カトリック信者）などの人々であり、再会して親交を深めている。

講演のテーマ、教会からの依頼、さらには訪問した友人・知人のほとんどがカトリック信者であったことから、「東北巡講」の旅は、カトリックの教えを広める旅と言えよう。それは、長詩篇『天父と閑古鳥』に、「吾今 御旨のまにまにぞ／聖教伝ふべく来たり／北の陸奥、盛岡や／此処翠緑の三本木」（二〇）、「征旅の如くに語りたり／人々の為、神のため／み教え弘めてかたりけり／かくてぞ、詩の寵、今ぞ得し」（二一）と表現されていることからも言える。

この旅における作品は、詩七篇（二篇は回想）、短歌二十二首、俳句二十句である。このうち『三木露風全集』や作品集などに収められているものは、詩四篇（二篇は回想、「湖上にて」の短歌四首、「妻仲子宛て」短歌一首であり、ほとんどの作品は初出のままで見い出されていなかった。

露風の東北巡講の旅における作品、特に短歌や俳句は、比較的に明解なものが多い。それは、旅日記的な紀行文という性格もあり、またその時の創作事情や感慨が詳しく語られているからである。

作品には、旅の目的であった「講演」や「友人」についてのものはない。三本木天主公教会のコルジェ靈父に贈った『十和田湖の別れ 或るフランス人に贈る』という詩があるのみである。

多くの作品は、もう一つの目的である「自然を観ること」に関わって発想されたものである。各地における作品の大半は、その土地の風物に触発されている。例えば、名所旧跡や風光明媚な所における作品では、その土地の歴史や伝説などに関心を寄せている。毛馬内

や秋田の古城址では、懐古の情に駆られ、佳景に富む十和田湖では神秘性を感じる。また、日常生活の身近にある庭や野における作品では、目に映る季節の風物が多い。五月は閑古鳥、五月雨、すずらん、つつじ、すみれ、山桜を詠み、六月は青葉、瑠璃鳥、八重桜、しやくなげ、涼風、麦、梨などを詠む。このような自然と自己とがその内面において照応し、一元化するのである。

つまり露風にとっては、これらすべてが天父の恵みによるものであった。そのことは、例えば『湖上にて』の短歌で「天の神よりたまひし 十和田湖よ 水とわか葉を われは観て行」と詠んでいる。また、詩『一つの巖窟』において、十和田湖の屹立する巖峭の上部に「救いの手をのべて憐むマドンナ」を見る。さらに、そのことは三本木町の野の風景と閑古鳥に寄せて、天父の恩恵をテーマとする長詩『天父と閑古鳥』に端的に表れている。そこでは、「天にまします我が神は／吾は知らねど、今想ふ／其の時日毎に年毎に／天より恵て照らされぬ」（一一）、「愛する妻よ、われら今／愛の花園心には／ふたりし、持ちてありぬるよ／されど、その我れ、汝を知らず」（一八）、「汝れ知ることく、天の母／父なる大神諸共に／われを抱きて示します／春の、御蒼穹と野の緑」（二二）、「天父の御愛のいつくしみ／哀憐れみ給ふ聖心に／つかはされたる閑古鳥／かなしき愛の閑古どり」（四九）などと表現し、コルジェ神父や三浦萬之助との交流、愛妻モニカとの結婚、春の青空と野の緑、愛する閑古鳥の声、すべてが天父の恩寵によるものと受け止めている。

露風にとっては、自分の全生涯、また自然の物風や風景、名所旧跡までもが、天父の賜物であったのである。そして、「天父の御愛を懐ひつ、／吾は歌をば作らむと／案じて歩みたりけれど／善き歌

としては無かりけり」とあるように、作品までもが天父の恵によるものであったのである。

露風は自分の創作活動について、「私は、初め、抒情を以て、詩を作り初め、後、象徴詩に至り、短唱を作り、更に、宗教詩を書くやうになった」と述べている。^{注16}

その詩風に関して、露風の近代詩人としての到達点とされている大正二年（一九一三）の第四詩集『白き手の獵人』において神秘主義的象徴主義と呼ばれる詩風が形成され、大正四年（一九一五）『露風詩話』が書かれた時期に東洋的汎神論的自然観と、象徴詩観が形成されたと指摘されている。^{注17}

この東北巡詩の旅における作品は、まさに、この両者が現われているといえよう。感覚や官能における直観的な自然の把握、あらゆるものに神が宿り一切万有は神であり、神と世界とは本質的には同一であるとする宗教観に基づく独自の作風が看取されるのである。

また、この旅が大正十五年だったことが重要である。佐藤房儀は、「三木露風の活躍は、大正五、六年で終り、それ以後は詩壇の第一線から退いたと見られている。……しかし、彼は、大正十五年（三十八歳）まで毎年何らかの著書を出版し、詩人として活躍している」とし、その後、『小さな花を讃美する歌』（昭和三年）や自伝『我が歩める道』（昭和三年）、『日本カトリック教史』（昭和四年）を刊行した以後、新刊の著書がなくなることから「彼の活躍は大正十五年まで、この年をもって第一線を退いたといえる」と説く。^{注18}

しかし、露風は『山崎新聞』に、大正十五年の東北巡行の旅における作品のほか、昭和四年までの作品を載せている。本稿は見い出されていない作品の諸相という紹介的なものであったが、これらの

作品の象徴主義に関する研究などは、露風文学の評価にとって重要な意味を持つであろう。

引用文献

- 注1 家森長治郎「三木露風未発表の長詩篇『天父と閑古鳥』について——翻刻、三木露風『天父と閑古鳥』『妻に』——『奈良教育大学国文・研究と教育』十六号、平成五年三月
- 注2 『東北巡講記（二）』『小羊』六卷七号、昭和三年七月
- 注3 『北日本の旅と自然と（八）』『山崎新聞』昭和三年四月一日
- 注4 中島「盛岡における三木露風氏の講演」『声』六〇五号、大正十五年六月
- 注5 小田島孤舟『第八集歌集 旗すすき』ぬはり社、昭和四年三月
- 注6 『声』第六一〇号、大正十五年十月
- 注7 注2に同じ
- 注8 注3に同じ
- 注9 『北日本の旅と自然と（卅七）』『山崎新聞』昭和三年八月二十六日
- 注10 『東北巡講記（二）』『小羊』六卷八号、昭和三年八月
- 注11 注10に同じ
- 注12 『北日本の旅と自然と（二）』『山崎新聞』昭和三年二月二十六日
- 注13 注2に同じ
- 注14 注12に同じ
- 注15 三木露風『当別から』『修道院雑筆』新潮社、大正十四年八月
- 注16 三木露風『啄木を弔ふ』『良心』白日社、大正四年十一月
- 注17 注10に同じ
- 注18 平成三年七月に三鷹市にあった露風旧居の解体によって出現した、八メートルに余る和紙の巻物に墨書されていた長詩。発見者は、霞城館館長苗村樹氏。詩の引用は、注1の家森長治郎の論。翻訳による。
- 注19 『東北巡講記（三）』『小羊』六卷九号、昭和三年九月
- 注20 『北日本の旅と自然と（十二）』『山崎新聞』昭和三年四月二十一日
- 注21 注1に同じ

- 注22 「北日本の旅と自然と(十四)」『山崎新聞』昭和三年五月六日
注23 注22に同じ
- 注24 大町桂月「十和田湖」『桂月全集第二卷』桂月全集刊行会、大正十五年二月
- 注25 三浦萬之助「三木露風氏の三本木町に於ける講演」『声』六〇七号、大正十五年八月
- 注26 「蠱惑の源」『詩歌』大正二年五月、『白き手の獵人』東雲堂、大正二年九月所収
- 注27 アーサー・ウィリアム・シモンズ(一八六五年〜一九四五年)、旅を愛する英国の詩人・文芸評論家。大正期の印象派詩人に多大な影響を与えた。岩野泡鳴訳(大正二年)『表象派の文学運動』など。
- 注28 「北日本の旅と自然と(十五)」『山崎新聞』昭和三年五月十一日
- 注29 安部宙之介『三木露風研究』日本図書センター、昭和五十八年
- 注30 三木露風「第二十四章シモンズの詩と気分」『象徴主義信条』昭和三年(未刊)『三木露風全集第二卷』所収
- 注31 「北日本の旅と自然と(十八)」『山崎新聞』昭和三年六月一日
- 注32 「北日本の旅と自然と(十九)」『山崎新聞』昭和三年六月六日
- 注33 注32に同じ
- 注34 「北日本の旅と自然と(廿三)」『山崎新聞』昭和三年七月一日
- 注35 「北日本の旅と自然と(廿七)」『山崎新聞』昭和三年七月二十一日
- 注36 「秋田山形新潟巡講記(二)」「小羊」六号、昭和三年十二月
- 注37 「北日本の旅と自然と(三十)」『山崎新聞』昭和三年八月十六日
- 注38 注37に同じ
- 注39 注37に同じ
- 注40 堀まどか「象徴主義移入期の芭蕉再評価―野口米次郎のもたらしたもの」『総研大文化科学研究』第二号、平成十八年
- 注41 『森鷗外・夏目漱石・三木露風未発表書簡集』日本近代文学館、昭和四十七年
- 注42 「詩歌の鑑」『露風詩話』(第一書房版) 大正十五年十一月
- 注43 「詩体(長詩及短詩)」『露風詩話』(第一書房版) 大正十五年十一月
- 注44 「北日本の旅と自然(一)」「山崎新聞」昭和三年二月十六日
- 注45 注2に同じ
- 注46 「あとがき」『三木露風詩集第一卷』第一書房、大正十五年十月

- 注47 三浦仁『露風詩話』解説『露風詩話』日本図書センター、平成五年
- 注48 佐藤房儀「三木露風論(承前)」『国文学研究』八十八、昭和五十八年六月

付記

本稿を草するにあたり、貴重な資料である『山崎新聞』の閲覧にご協力いただいた『山崎新聞』発行元の山下家、高田智之氏(ジャーナリスト、元共同通信社記者)、兵庫県宍粟市教育委員会社会文化財課に感謝申し上げます。なお、引用文の旧漢字は新字に改めた。また引用作品については、「ルビ」を除いた。